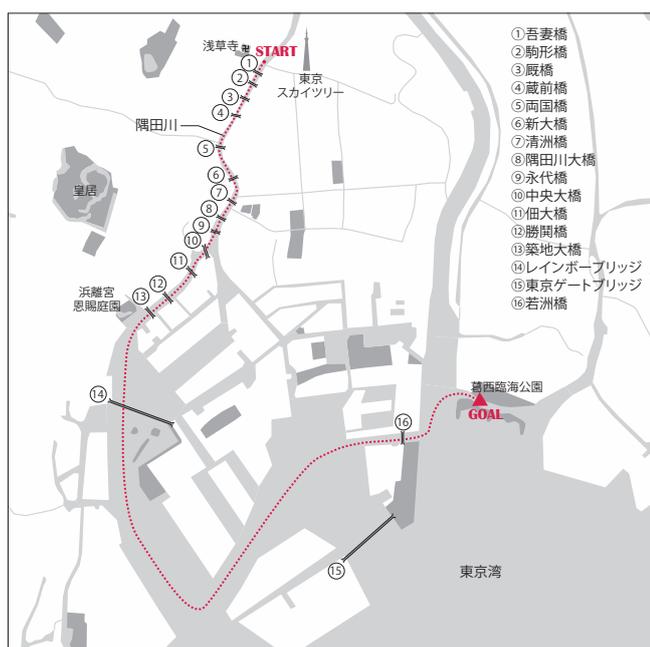


隅田川・東京湾 橋梁見学クルーズを開催

技士会は、10月18日、一般の方向けに土木施設や技術の重要性を感じていただくための見学会として「隅田川・東京湾橋梁見学クルーズ」を開催しました。

約70名が参加し、川や河岸の歴史から橋の見どころ、さらには都市整備まで幅広い解説で、東京の様々な側面を感じられる見学会となりました。



船のルートと通過橋

■船上で江戸・東京の土木技術に触れる

見学ルートとなる隅田川・東京湾は物資の流通拠点として江戸の生活を支えていました。隅田川は江戸時代、武蔵国と下総国の境界とされ、多くの人々に親しまれてきた川です。また、東京湾は徳川幕府により埋立てが行われ、東京の発展とともに開発が進められました。関東大震災以降、復興で架けられた数々の橋梁、1964年オリンピックの年にできあがった首都高など、江戸時代以降の東京の近代化を間近に感じられる場所でもあります。

今回の見学会は、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所研究員である難波匡甫先生を解説者としてお招きしました。解説は川や河岸の歴史から、橋の見どころ、さらには江戸のまちづくりまで幅広く、水上から東京の変遷を感じられるクルーズとなりました。

■浅草の船着場から出船

当日は浅草二天門発着場から水上バス「こすもす」で出発。隅田川を下り、東京湾へと向かいます。雲一つない晴天で、集まった人数は総勢70名。一つ目の橋梁、吾妻橋を通過すると、普段は見ることができない真下からのアングルに驚きの参加者たち。早速カメラを手に撮影が始まりました。

隅田川を進むと、現れたのは両国橋。江戸最大の火事といわれる明暦の大火がきっかけで架けられた橋です。防衛上、隅田川への架橋は厳しく制限されてきましたが、この火事によって逃げ場を失い大勢の人々が亡くなったことで、続々と隅田川に橋が架けられるようになりました。両国橋周辺は多くの浮世絵に残されているように、江戸随一の盛り場として賑わった場所でした。

■中央区をつなぐ橋

次に見えてきたのは斜めに張られたケーブルが特徴的な中央大橋。隅田川河口の小さな島に摂津国佃村の漁師33人が移り住み発展してきた佃島ですが、現在はタワーマンションが立ち並ぶこの場所を中央大橋がつないでいます。斜張橋であるこの橋はデザイン面でも洗練されており、中央区のシンボルとして住民に親しまれています。



中央大橋とタワーマンション群

■隅田川最下流の橋梁

日本に現存する数少ない可動橋である勝鬨橋。昭和15年に開催予定だった万国博覧会のメインゲートとして計画され、完成した橋です。勝鬨橋を抜けると、隅田川に架かる29番目の橋「築地大橋」が見えてきます。東京都市計画道路環状2号線の一部となるアーチ橋で、整備が進められてい

る貴重なシーンを見ることができました。2020年に行われる東京オリンピックでは、競技会場が集中する臨海部と都心部を結ぶ大動脈になると期待されている橋です。



勝鬨橋



築地大橋

■新たな東京湾のランドマーク

東京湾に入っすぐ現れたのはレインボーブリッジ。長さ798mというダイナミックな橋梁はととても壮大でした。東京湾を進むと、新たなランドマークである話題のゲートブリッジが見えてきます。船の交通による桁下と、羽田空港の近くのため高さ制限があることにより採用されたトラス構造。世界最大級のトラス橋は、恐竜2頭が向き合っているように見えるユニークな形状となっており、参加者たちは楽しそうに記念撮影を行っていました。

参加された方々からは「家族で楽しめる、素晴らしい見学会でした」という意見をいただき、また「土木技術のダイナミックさを感じられました」と充実した時間を過ごした様子でした。